

ときめき人

Tokimeki bito



新しいことへの挑戦を続け
「みやぎ園芸振興大賞」受賞

石ノ森農場

石ノ森農場の皆さん。後列左から2番目が代表取締役の山内健太郎さん、後列右が会長の山内啓司さん。



「従業員と共に、日々目標を立てて、目の前の仕事と、向き合っています。その取り組みを認めていただきありがたいです」と、石ノ森農場代表取締役の山内健太郎さんは控えめに話す。

同社は、8月に開催された宮城県園芸振興大会で「みやぎ園芸振興大賞」に輝いた。国のキュウリ指定産地である本市において、県内で初めて環境制御設備付低コスト耐候性ハウスを導入。これにより、キュウリの環境制御技術が県内に広まるきっかけとなり、本市のキュウリ生産者の収量向上に貢献してきた。また、地域の子もたちへの食農教育、学校給食への食材提供を通じた地産地消への取り組みも評価され、大賞受賞となった。

山内さんは創業当初を振り返り、「初めは会長で

ある父と二人で始めた農業でしたが、『地域の農業を守り、新しいことに挑戦したい』という思いから法人を立ち上げ、今もその思いは変わりません」と力強く話す。現在は、社員7人、パートタイマー15人が一丸となって、キュウリ・米・切り花などを生産し、スーパーなどにも販路を広げている。海外からの技能実習生の受け入れも視野に入れており、現地の日本語学校を視察するなど、新たな取り組みへの準備も進めている。

「将来的には輸出という夢もありますが、まずは栽培技術をさらに磨き、地域全体の園芸振興に貢献していきたい。それが、地域の農業を守ることにつながると信じています」と語る。農業の未来を見据え、石ノ森農場の挑戦はこれからも続いていく。

編集後記

▼特集を担当。取材の先々で出会う、数えきれないほどの笑顔こそが「地域にぎわいは必要か」という問いへの答えだと感じました。イベントやサークル活動に足を運ぶことも、にぎわいの種を育てる大切な一歩。普段インドア派の私も、もう少し外に出かけてみようと思いました。(添田)

▼教育資料館を清掃する、登米小学校の児童を取材しました。現地で待っていると、バケツと雑巾、ほうきを持って元気いっぱい学校から歩いて来た子どもたち。とても寒い日でしたが、協力して一生懸命掃除をしている姿を見て、気持ちほっこりでした。(森田)

▼この秋は、プロの演奏や高校生の吹奏楽、中学生の合唱など、音楽に触れる機会が多くありました。聴いていると、ポジティブな気持ちになって創造力が増したような気分。昔から音楽が好きなので、これからも日常的に触れていこうと思います。歌うのは苦手なんですけどね。(高橋)